

福祉学生のもつ援助対象者イメージとパーソナリティ変容についての研究

A Study of the Personality and Image Change of Social Welfare Students with Assistance.

占 部 尊 士、村 岡 則 子、森 永 佳 江、大 原 朋 子

Takashi Urabe

Noriko Muraoka

Kae Morinaga

Tomoko Oohara

長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要

10巻1号

Bulletin of the Research Institute of Regional Area Study

Nagasaki Wesleyan University

2012年3月

福祉学生のもつ援助対象者イメージとパーソナリティ変容についての研究*

占部尊士**、村岡則子、森永佳江、大原朋子

A Study of the Personality and Image Change of Social Welfare Students with Assistance.

Takashi Urabe, Noriko Muraoka, Kae Morinaga, Tomoko Oohara

〈キーワード〉

福祉教育、援助対象者イメージ、イメージ分析

〈要旨〉

福祉専門職の教育課程においては、対人援助職としての倫理観や価値観を図る客観的な評価の機会が必要である。そこで本研究では、福祉学生の性格特性と援助対象者の捉え方について明らかにし、これらの経時的変化を基に、これからの福祉専門職養成における効果的な教育システムの構築を目指すことを目的とした。

福祉学生の性格特性は、責任感が強く、現実的で事実を重要視し、客観性を重んじる傾向が強くなっており、福祉専門職は臨床現場において利用者のニーズを正確に把握し、支援目標に沿った計画を客観的な視点をもって立案するが、その過程で必要な資質が教育課程において確実に形成されていた。対象者別のイメージは、これまでの生活環境で捉えられたイメージをもとに形成されており、福祉専門職としての資質形成において教育内容で変化を促すためには、意図的かつ計画的に学習プログラムを立てていかなければならないことがわかった。

福祉専門職養成における教育効果として、福祉学生の成長を常に把握し、教育プログラムに反映していくシステムを作ることが求められている。そのためには、教員による客観的な評価と学生自身による自己評価を継続的にを行い、個々の学習状況を把握するだけでなく、学習プログラム全体の評価も行っていく必要があると考えられる。さらにこれからの福祉教育は、臨床現場で活躍できる人材を養成すべく、養成校と学生のみならず、実践現場との協働で教育プログラムを作成し、実践的な学びの場を決められた施設実習だけでなく、普段の学習においても取り入れていく取り組みが必要であると思われる。

はじめに

昨今の日本社会においては閉塞感が漂っており、将来に不安を抱える国民が増えた「不安社会」といわれている。具体的には、経済状態の悪化に伴い、人件費削減の一環としてのリストラやパートタイム・派遣など非正規労働者へのシフトにより、労働賃金の減少が失業者の増加や「ワーキングプア」を生み出し大きな社会問題となってきた。また、急速な少子高齢化の進展により、地方においては地域のつながりが衰退し、コミュニティの維持自体が困難となるような「限界集落」も発生してきている。そして都市部においても、家族形態の変容と高齢化の影響で高齢者夫婦のみ世帯、更には高齢者の単身世帯が増加してきている。つまり、これからの社会においては、職が安定せず、家族も持たず、死を看取ってくれる人もいないという人が増えることで、福祉専門職への社会的ニーズがさらに高まってくると考えられている。このように国民が要請する社会福祉の増進や向上を図るためには、社会福祉従事者の確保と資質の向上は欠かすことのできない最も重要な課題¹⁾とされる。

そこで社会福祉士や介護福祉士など福祉専門職の養成については、2006(平成18)年に資格取得の方法や教育方法の見直しの方向を示す「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」が社会保障審議会福祉部会から出され、これを受けて、2007(平成19)年には社会福祉士及び介護福祉士法が改正された。そして福祉専門職の養成校では、新たに社会福祉士介護福祉士養成施設指定規則に定められた教育内容を基に、福祉職として必要とされる知識の獲得から演習形式の講義による技術の習得、そして実習教育による実践力の向上など体系的な学びの機会を提供している。このように、各養成校では社会のニーズに対応し得る福祉人材の育成を目指した教育的な取り組みを行っている。

* Received March 15, 2012

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

研究目的

社会の変化に伴い多様化し、高度化する福祉ニーズに対応できる質の高い人材を確保・養成していくために福祉専門職の養成施設では様々な教育的手法を取り入れ、福祉学生に対人援助職としての成長を促している。つまりは専門職養成課程において展開される学習プログラムが福祉学生の成長を促進し、福祉専門職としての資質を身に付けるものでなければならないのである。しかしながら福祉学生がどのように成長し、専門職としての資質を形成しつつあるかについては、学力試験の結果では表せない広範的な視点が重要である。そこで教育課程において、対人援助職としての倫理観や価値観を図る客観的な評価の機会が必要であると考えた。

よって本研究では、福祉学生の性格特性と援助対象者の捉え方について明らかにし、これらの経時的变化を基に、これからの福祉専門職養成における効果的な教育システムの構築に役立てることを目的とした。

研究方法

1. 調査対象と時期

介護福祉士や社会福祉士などの福祉専門職を目指す福祉系専門学校生127名(男性32名、女性94名、性別不明1名)に対し調査を実施した。本研究では、欠損値のある者、Q尺度35点以上の得点を示す者を除外した121名(男性29名、女性92名)の回答を分析対象とし、有効回答率は95.28%であった。

調査時期としては、1回目の調査を調査開始年度の10月中旬(以下、初年度)に実施し、福祉学生の成長など変化を捉えるため、その1年後の同時期(以下、次年度)に2回目の調査を行った。

2. 手続き

本調査は、著者らの担当する講義の中で実施・回収を行った。調査への協力依頼文書の中で、本調査はあくまでも任意であり、成績などの評価とは一切関係ないこと、回答結果はコンピューター処理され、個人の回答が外部に知られることはなく、結果は学術的な目的以外には使用しないことを明記した。また、調査票を配布するにあたり、調査対象者へは本研究に関する趣旨を説明し、同意が得られた上で実施した。さらに、倫理的配慮の観点から、記述は無記名とし、解析者は個人が特定できないデータを用いて統計学的解析を行った。

3. 質問項目

1) イメージの測定(SD法)

福祉学生のもつ援助対象者イメージの測定を行うものとして、Semantic Differential Method(以下SD法と略す)を用いた。SD法とは、1950年代にアメリカの心理学者オズグッド(Osgood, C.E.)らによって、意味の研究方法、すなわち特定の記号や概念が意味し指示する内容を、客観的・多次的・定量的に測定する方法として開発されたものである。

具体的には、「明るいー暗い」、「良いー悪い」などの正反対の意味をもついくつかの形容詞対からなる尺度上に測定対象を評定させ、その評定点の分析によって測定対象間の意味差を判別する方法である²⁾。本研究では、井上ら³⁾が心理学や教育学の分野で用いパーソナリティ認知の測定に有効な尺度とした49の形容詞対から使用頻度の高い22項目の形容詞対を用いた。また、回答欄には「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」の両極回答の5段階の評定尺度を設けた。評定尺度の配点は1～5点とし、各項目において得点の低いほど肯定的なイメージであり、得点が高いほど否定的なイメージとなる。

2) 性格特性の把握(新版TEG)

「東大式エゴグラム」Tokyo University Egogram(以下TEGと略す)は質問紙法による性格検査の一つである。エゴグラム(egogram)とは、各人の自我状態を表すために心的エネルギーが自我の各機能にどのように配分されているかを数量化して、棒グラフで示したものである。TEGは、それにより自己の性格・行動パターンのあり方を把握する。

TEGはアメリカの精神科医エリック・バーン(Berne, E.)が創始した交流分析Transactional Analysis理論を基礎としている。TEGの基礎となる交流分析理論では、人の内部には、親の自我状態(Parent: 以下Pと略す)、成人の自我状態(Adult: 以下Aと略す)、子どもの自我状態(Child: 以下Cと略す)の三つの自我状態があるとした。このP、A、Cのバランスを知ることによって性格特性を知ることができる。このような構造をより深く理解するため、Pはさらに、批判的な親の自我状態(Critical Parent: 以下CPと略す)と、養育的な親の自我状態(Nurturing Parent: 以下NPと略す)に、Cはもって生まれた自然な姿である自由な子ども(Free Child: 以下FCと略す)と、親の影響を受けた順応した子ども

(Adapted Child：以下A Cと略す) のそれぞれ二つに分けられる。この全部で五つの機能側面として、これらがどのように機能しているかを分析する⁴⁾。

なお、新版T E Gでは妥当性尺度として、妥当性尺度 (L) と、疑問尺度 (Q) を採用している。妥当性尺度 (L) は、4 点以上の場合、T E G

に対する応答態度に関する信頼性が乏しいと考えられ、判断には注意を要するとされる。疑問尺度 (Q) は、35点以上は判断を保留したほうがよいとされる⁵⁾。

自我状態の構造モデルとその特徴については、図1に示す。

親の自我状態 (Parent ; P)	批判的親 (Critical Parent ; CP)
	養育的親 (Nurturing Parent ; NP)
成人の自我状態 (Adult ; A)	成人 (Adult ; A)
子どもの自我状態 (Child ; C)	自由な子ども (Free Child ; FC)
	順応した子ども (Adapted Child ; AC)

(Critical Parent ; CP)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 責任感が強い ・ 批判的である ・ 完全主義 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 厳格である ・ 理想をかかげる
(Nurturing Parent ; NP)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 思いやりがある ・ やさしい ・ 同情しやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 世話好き ・ 受容的である
(Adult ; A)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現実的である ・ 冷静沈着である ・ 客観性を重んじる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事実を重要視する ・ 効率的に行動する
(Free Child ; FC)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自由奔放である ・ 明朗快活である ・ 活動的である 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感情をストレートに表現する ・ 創造的である
(Adapted Child ; AC)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人の評価を気にする ・ 遠慮がちである ・ よい子としてふるまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他者を優先する ・ 自己主張が少ない

図1 自我状態の構造モデルと特徴

東大式エゴグラム (T E G) は、1984年に石川らにより初版が刊行されたが、因子分析による質問項目の選定と標準化スケールを用いた当時としては画期的なエゴグラムである。1993年にはT E G第2版が出版され、臨床現場だけではなく、教育界、産業分野などでも幅広く使用されるようになった。そして、2000年には、これまでの蓄積された臨床データとさらなる科学的手順の利用によって、質問項目の選定、標準化を実施し、新版T E Gが刊行された⁶⁾。

新版T E Gは55の質問項目で構成され、自己記入方式である。自分に当てはまるか当てはまらないかによって、「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」のいずれかに回答するものである⁴⁾。

4. 統計解析

まず、福祉学生の捉える援助対象者 (ホームレス、精神障害者、認知症高齢者) イメージにおけ

る各年度の変化をみるために対応あるサンプルのt検定を行った。次に、福祉学生が捉える援助対象者 (ホームレス、精神障害者、認知症高齢者) イメージの内容を因子分析 (主因子法、プロマックス回転) によって明らかにした。なお、これら一連の集計および解析では、Microsoft Excel 2007、Windows for PASW Statistics18.0の統計ソフトを用いた。

結果

1. 各援助対象者イメージ得点の変化

1) ホームレスイメージの変化

社会的排除の対象である援助対象者として、ホームレスイメージの変化をみるために、SD法によって尋ねた設問22項目ごとの平均値差がみられるかについて、対応のあるサンプルのt検定によって有意差を求めた。

その結果、各年代のホームレスイメージにおい

て統計的な有意な差はみられなかった。(図2)

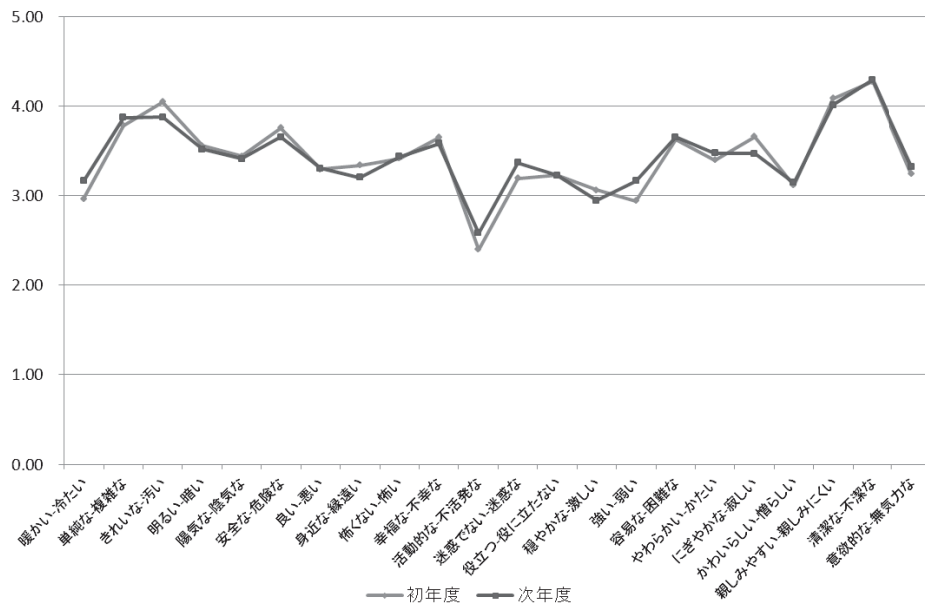


図2 ホームレスイメージの変化

2) 精神障害者イメージの変化

社会的排除の対象である援助対象者として、精神障害者イメージの変化をみるために、SD法によって尋ねた設問22項目ごとの平均値差がみられるかについて、対応のあるサンプルのt検定に

よって有意差を求めた。

その結果、各年代の精神障害者イメージにおいて「安全な－危険な」($t=3.16$ $df=235$ $p<0.01$)、「穏やかな－激しい」($t=2.52$ $df=234$ $p<0.05$)の2項目で有意に差がみられた。(図3)

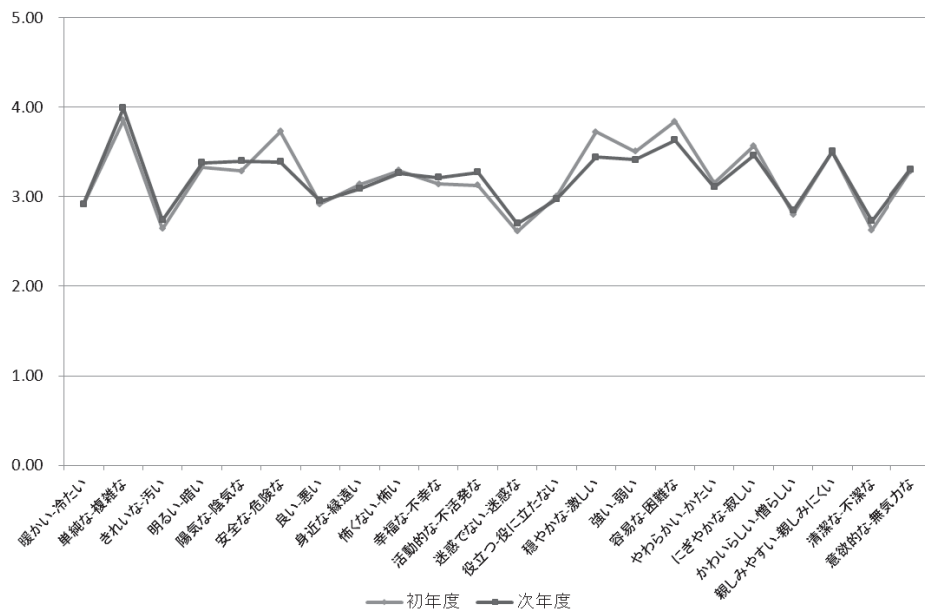


図3 精神障害者イメージの変化

3) 認知症高齢者イメージの変化

社会的排除の対象である援助対象者として、認知症高齢者イメージの変化をみるために、SD法によって尋ねた設問22項目ごとの平均値差がみられるかについて、対応のあるサンプルのt検定によって有意差を求めた。

その結果、各年代の認知症高齢者イメージにお

いて「明るい－暗い」($t=-2.77$ $df=232$ $p<0.01$)、「活動的な－不活動な」($t=-2.08$ $df=235$ $p<0.05$)、「穏やかな－激しい」($t=2.11$ $df=232$ $p<0.05$)の3項目で有意に差がみられた。(図4)

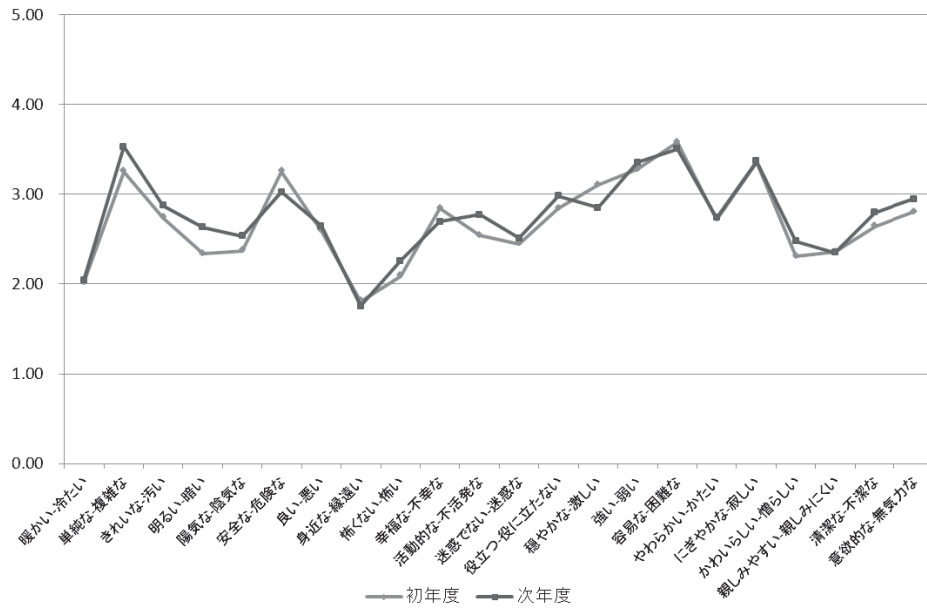


図4 認知症高齢者イメージの変化

2. 各援助対象者イメージの因子分析

1) ホームレスイメージの因子構造

まず、初年度のホームレスイメージについて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化、および解釈可能性から5因子解を妥当と判断してこれを採用した。また、採用された各因子の

信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.41\sim0.75$ と信頼性が確認された。5因子の累積寄与率は41.35%であった。各因子の内訳は、第1因子7項目（ $\alpha=0.73$ ）、第2因子3項目（ $\alpha=0.75$ ）、第3因子4項目（ $\alpha=0.58$ ）、第4因子2項目（ $\alpha=0.57$ ）、第5因子2項目（ $\alpha=0.41$ ）である。その内容を表1に示す。

表1 ホームレスイメージの因子構造(初年度)

項目番号	項目内容	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	共通性
22	意欲的な-無気力な	0.87	-0.02	-0.15	0.04	-0.13	0.70
11	活動的な-不活発な	0.71	-0.08	-0.01	-0.07	-0.08	0.42
13	役立つ-役に立たない	0.49	-0.03	0.12	-0.07	0.14	0.30
10	幸福な-不幸な	0.45	0.08	0.05	-0.08	0.31	0.36
19	かわいらしい-憎らしい	0.38	0.11	0.30	-0.11	0.06	0.36
18	にぎやかな-寂しい	0.38	0.37	-0.09	-0.10	-0.01	0.32
1	暖かい-冷たい	0.35	-0.06	0.06	0.16	-0.07	0.20
3	きれいな-汚い	-0.21	0.85	0.14	-0.23	0.11	0.62
4	明るい-暗い	-0.01	0.73	-0.09	0.30	-0.16	0.80
5	陽気な-陰気な	0.23	0.55	-0.03	0.12	0.01	0.55
9	怖くない-怖い	-0.06	0.03	0.65	0.11	-0.15	0.42
6	安全な-危険な	-0.05	-0.01	0.54	-0.02	0.00	0.27
7	良い-悪い	0.22	-0.11	0.41	0.17	0.01	0.31
12	迷惑でない-迷惑な	0.02	0.22	0.38	0.02	-0.14	0.26
17	やわらかい-かたい	-0.12	-0.04	0.01	0.73	0.19	0.47
20	親しみやすい-親しみにくい	0.09	-0.03	0.23	0.52	0.09	0.43
16	容易な-困難な	0.02	0.09	-0.13	0.25	0.66	0.48
2	単純な-複雑な	-0.09	-0.08	-0.06	0.09	0.44	0.19
寄与率(%)		21.83	6.04	5.21	4.65	3.62	
累積寄与率(%)		21.83	27.87	33.09	37.74	41.35	
α 係数		0.73	0.75	0.58	0.57	0.41	

第1因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号22「意欲的な－無気力な」、項目番号11「活動的な－不活発な」、項目番号13「役立つ－役に立たない」、項目番号10「幸福な－不幸な」、項目番号19「かわいらしい－憎らしい」、項目番号18「にぎやかな－寂しい」、項目番号1「暖かい－冷たい」の7項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第1因子を「無意味」因子と命名した。

第2因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号3「きれいな－汚い」、項目番号4「明るい－暗い」、項目番号5「陽気な－陰気な」の3項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第2因子を「不快感」因子と命名した。

第3因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号9「怖くない－怖い」、項目番号6「安全な－危険な」、項目番号7「良い－悪い」、項目番号12「迷惑でない－迷惑な」の4項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第3因子を「嫌悪感」因子と命名した。

第4因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号17「やわらかい－かたい」、項目番号20「親しみやすい－親しみにくい」の2項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第4因子を「距離

感」因子と命名した。

第5因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号16「容易な－困難な」、項目番号2「単純な－複雑な」の2項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第5因子を「難解感」因子と命名した。

第1因子：「無意味」（7項目、 $\alpha=0.73$ ）

第2因子：「不快感」（3項目、 $\alpha=0.75$ ）

第3因子：「嫌悪感」（4項目、 $\alpha=0.58$ ）

第4因子：「距離感」（2項目、 $\alpha=0.57$ ）

第5因子：「難解感」（2項目、 $\alpha=0.41$ ）

よって、上記の18項目5因子を本研究では、初年度における福祉学生のもつホームレスイメージを捉えるためのホームレスイメージ尺度とする。

次に、次年度のホームレスイメージについて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化、および解釈可能性から5因子解を妥当と判断してこれを採用した。また、採用された各因子の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.53\sim0.79$ と信頼性が確認された。5因子の累積寄与率は44.80%であった。各因子の内訳は、第1因子5項目（ $\alpha=0.72$ ）、

表2 ホームレスイメージの因子構造(次年度)

項目番号	項目内容	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	共通性
		抵抗感	不快感	嫌悪感	無意味	憎悪感	
20	親しみやすい－親しみにくい	0.83	-0.10	0.05	-0.07	-0.01	0.62
21	清潔な－不潔な	0.62	0.06	-0.01	-0.04	-0.05	0.37
16	容易な－困難な	0.61	0.17	-0.06	-0.14	-0.01	0.39
18	にぎやかな－寂しい	0.41	-0.10	0.03	0.25	0.11	0.35
17	やわらかい－かたい	0.39	0.17	-0.12	0.17	-0.04	0.27
4	明るい－暗い	-0.01	0.84	0.02	0.03	0.04	0.75
3	きれいな－汚い	-0.01	0.76	0.02	-0.18	-0.03	0.54
5	陽気な－陰気な	0.07	0.69	-0.06	0.08	0.06	0.56
10	幸福な－不幸な	0.34	0.37	-0.10	0.23	-0.14	0.41
9	怖くない－怖い	-0.08	-0.02	0.80	0.13	-0.20	0.54
12	迷惑でない－迷惑な	0.02	0.09	0.57	-0.08	0.31	0.61
14	穏やかな－激しい	0.00	-0.03	0.52	-0.03	0.05	0.27
6	安全な－危険な	0.36	-0.15	0.36	0.00	-0.01	0.31
11	活動的な－不活発な	-0.05	-0.10	-0.12	0.83	0.11	0.62
22	意欲的な－無気力な	0.15	-0.07	0.03	0.61	0.30	0.66
1	暖かい－冷たい	-0.01	0.02	0.43	0.48	-0.07	0.50
13	役立つ－役に立たない	-0.17	0.17	0.26	0.40	-0.14	0.25
15	強い－弱い	0.01	-0.11	-0.03	0.14	0.56	0.34
19	かわいらしい－憎らしい	0.20	0.00	0.19	-0.20	0.53	0.50
8	身近な－縁遠い	-0.02	0.15	-0.13	0.18	0.47	0.29
7	良い－悪い	-0.04	0.22	0.25	0.01	0.38	0.39
寄与率(%)		23.47	7.30	5.36	4.70	3.97	
累積寄与率(%)		23.47	30.77	36.13	40.83	44.80	
α 係数		0.72	0.79	0.66	0.70	0.53	

第2因子4項目 ($\alpha=0.79$)、第3因子4項目 ($\alpha=0.66$)、第4因子4項目 ($\alpha=0.70$)、第5因子4項目 ($\alpha=0.53$)である。その内容を表2に示す。

第1因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号20「親しみやすいー親しみにくい」、項目番号21「清潔なー不潔な」、項目番号16「容易なー困難な」、項目番号18「にぎやかなー寂しい」、項目番号17「やわらかいーかたい」の5項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第1因子を「抵抗感」因子と命名した。

第2因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号4「明るいー暗い」、項目番号3「きれいなー汚い」、項目番号5「陽気なー陰気な」、項目番号10「幸福なー不幸な」の4項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第2因子を「不快感」因子と命名した。

第3因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号9「怖くないー怖い」、項目番号12「迷惑でないー迷惑な」、項目番号14「穏やかなー激しい」、項目番号6「安全なー危険な」の4項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第3因子を「嫌悪感」因子と命名した。

第4因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号11「活動的なー不活発な」、項目番号22「意欲的なー無気力な」、項目番号1「暖かいー冷たい」、

項目番号13「役立つー役に立たない」の4項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第4因子を「無意味」因子と命名した。

第5因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号15「強いー弱い」、項目番号19「かわいらしいー憎らしい」、項目番号8「身近なー縁遠い」、項目番号7「良いー悪い」の4項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第5因子を「憎悪感」因子と命名した。

第1因子：「抵抗感」(5項目、 $\alpha=0.72$)

第2因子：「不快感」(4項目、 $\alpha=0.79$)

第3因子：「嫌悪感」(4項目、 $\alpha=0.66$)

第4因子：「無意味」(4項目、 $\alpha=0.70$)

第5因子：「憎悪感」(4項目、 $\alpha=0.53$)

よって、上記の21項目5因子を本研究では、次年度における福祉学生のもつホームレスイメージを捉えるためのホームレスイメージ尺度とする。

2) 精神障害者イメージの因子構造

まず、初年度の精神障害者イメージについて、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化、および解釈可能性から3因子解を妥当と判断してこれを採用した。また、採用された各因子の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.70\sim 0.88$ と信頼性が確認

表3 精神障害者イメージの因子構造(初年度)

項目番号	項目内容	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	共通性
		停滞感	透明感	恐怖感	
11	活動的なー不活発な	0.80	0.10	-0.20	0.60
4	明るいー暗い	0.79	0.04	-0.07	0.60
5	陽気なー陰気な	0.79	0.11	-0.08	0.66
22	意欲的なー無気力な	0.74	0.05	0.06	0.64
18	にぎやかなー寂しい	0.73	-0.12	0.12	0.56
15	強いー弱い	0.67	-0.40	0.11	0.39
10	幸福なー不幸な	0.62	0.01	0.00	0.39
20	親しみやすいー親しみにくい	0.42	0.23	0.18	0.47
19	かわいらしいー憎らしい	0.15	0.71	-0.11	0.55
3	きれいなー汚い	-0.15	0.66	-0.13	0.32
21	清潔なー不潔な	-0.03	0.61	-0.12	0.31
12	迷惑でないー迷惑な	-0.16	0.55	0.21	0.36
13	役立つー役に立たない	0.10	0.50	0.13	0.40
7	良いー悪い	0.07	0.42	0.15	0.30
1	暖かいー冷たい	0.34	0.41	0.04	0.46
14	穏やかなー激しい	-0.08	-0.13	0.71	0.39
6	安全なー危険な	0.05	0.09	0.57	0.41
17	やわらかいーかたい	-0.12	0.35	0.54	0.50
16	容易なー困難な	0.29	-0.16	0.49	0.37
寄与率(%)		32.16	8.62	4.92	
累積寄与率(%)		32.16	40.78	45.70	
α 係数		0.88	0.77	0.70	

された。3因子の累積寄与率は45.70%であった。各因子の内訳は、第1因子8項目 ($\alpha=0.88$)、第2因子7項目 ($\alpha=0.77$)、第3因子4項目 ($\alpha=0.70$) である。その内容を表3に示す。

第1因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号11「活動的な－不活発な」、項目番号4「明るい－暗い」、項目番号5「陽気な－陰気な」、項目番号22「意欲的な－無気力な」、項目番号18「にぎやかな－寂しい」、項目番号15「強い－弱い」、項目番号10「幸福な－不幸な」、項目番号20「親しみやすい－親しみにくい」の8項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第1因子を「停滞感」因子と命名した。

第2因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号19「かわいらしい－憎らしい」、項目番号3「きれいな－汚い」、項目番号21「清潔な－不潔な」、項目番号12「迷惑でない－迷惑な」、項目番号13「役立つ－役に立たない」、項目番号7「良い－悪い」、項目番号1「暖かい－冷たい」の7項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第2因子を「透明感」因子と命名した。

第3因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号14「穏やかな－激しい」、項目番号6「安全な－危険な」、項目番号17「やわらかい－かたい」、項目番号16「容易な－困難な」の4項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第3因子を「恐怖感」因子と命名した。

おり、これらの項目の内容を検討し、第3因子を「恐怖感」因子と命名した。

第1因子：「停滞感」（8項目、 $\alpha=0.88$ ）

第2因子：「透明感」（7項目、 $\alpha=0.77$ ）

第3因子：「恐怖感」（4項目、 $\alpha=0.70$ ）

よって、上記の19項目3因子を本研究では、初年度における福祉学生のもつ精神障害者イメージを捉えるための精神障害者イメージ尺度とする。

次に、次年度の精神障害者イメージについて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化、および解釈可能性から3因子解を妥当と判断してこれを採用した。また、採用された各因子の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.49\sim0.74$ と信頼性が確認された。3因子の累積寄与率は30.29%であった。各因子の内訳は、第1因子7項目 ($\alpha=0.74$)、第2因子6項目 ($\alpha=0.68$)、第3因子5項目 ($\alpha=0.49$) である。その内容を表4に示す。

第1因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号11「活動的な－不活発な」、項目番号4「明るい－暗い」、項目番号22「意欲的な－無気力な」、項目番号1「暖かい－冷たい」、項目番号5「陽気な－陰気な」、項目番号10「幸福な－不幸な」、項目番号15「強い－弱い」の7項目からなっており、

表4 精神障害者イメージの因子構造(次年度)

項目番号	項目内容	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	共通性
		停滞感	恐怖感	透明感	
11	活動的な－不活発な	0.76	-0.31	0.06	0.46
4	明るい－暗い	0.73	-0.05	0.11	0.52
22	意欲的な－無気力な	0.65	-0.03	-0.12	0.43
1	暖かい－冷たい	0.51	0.03	0.27	0.36
5	陽気な－陰気な	0.45	0.16	0.17	0.34
10	幸福な－不幸な	0.39	0.10	0.04	0.20
15	強い－弱い	0.35	-0.03	-0.20	0.16
9	怖くない－怖い	-0.14	0.66	0.29	0.50
14	穏やかな－激しい	-0.18	0.63	-0.11	0.31
6	安全な－危険な	-0.03	0.49	0.18	0.29
20	親しみやすい－親しみにくい	0.23	0.45	0.18	0.41
17	やわらかい－かたい	0.10	0.43	0.11	0.27
16	容易な－困難な	0.18	0.40	-0.28	0.29
21	清潔な－不潔な	-0.03	-0.11	0.46	0.21
19	かわいらしい－憎らしい	0.14	0.07	0.46	0.26
12	迷惑でない－迷惑な	-0.05	0.24	0.41	0.24
8	身近な－縁遠い	0.07	0.04	0.38	0.16
3	きれいな－汚い	-0.06	0.10	0.37	0.16
寄与率(%)		16.42	8.74	5.13	
累積寄与率(%)		16.42	25.16	30.29	
α 係数		0.74	0.68	0.49	

これらの項目の内容を検討し、第1因子を「停滞感」因子と命名した。

第2因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号9「怖くないー怖い」、項目番号14「穏やかなー激しい」、項目番号6「安全なー危険な」、項目番号20「親しみやすいー親しみにくい」、項目番号17「やわらかいーかたい」、項目番号16「容易なー困難な」の6項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第2因子を「恐怖感」因子と命名した。

第3因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号21「清潔なー不潔な」、項目番号19「かわいらしいー憎らしい」、項目番号12「迷惑でないー迷惑な」、項目番号8「身近なー縁遠い」、項目番号3「きれいなー汚い」の5項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第3因子を「透明感」因子と命名した。

第1因子：「停滞感」（7項目、 $\alpha=0.74$ ）

第2因子：「恐怖感」（6項目、 $\alpha=0.68$ ）

第3因子：「透明感」（5項目、 $\alpha=0.49$ ）

よって、上記の18項目3因子を本研究では、次年度における福祉学生のもつ精神障害者イメージを捉えるための精神障害者イメージ尺度とする。

3) 認知症高齢者イメージの因子構造

まず、初年度の認知症高齢者イメージについて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化、および解釈可能性から3因子解を妥当と判断してこれを採用した。また、採用された各因子の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.53\sim0.82$ と信頼性が確認された。3因子の累積寄与率は36.76%であった。各因子の内訳は、第1因子11項目（ $\alpha=0.82$ ）、第2因子6項目（ $\alpha=0.67$ ）、第3因子3項目（ $\alpha=0.53$ ）である。その内容を表5に示す。

第1因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号

表5 認知症高齢者イメージの因子構造(初年度)

項目番号	項目内容	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	共通性
		親近感	躍動感	難解感	
12	迷惑でないー迷惑な	0.76	-0.16	0.13	0.56
19	かわいらしいー憎らしい	0.71	-0.01	0.14	0.53
20	親しみやすいー親しみにくい	0.61	0.05	0.04	0.41
8	身近なー縁遠い	0.61	-0.19	-0.35	0.39
3	きれいなー汚い	0.60	-0.01	0.02	0.36
9	怖くないー怖い	0.59	-0.17	-0.02	0.30
7	良いー悪い	0.50	-0.04	0.24	0.32
14	穏やかなー激しい	0.44	-0.18	0.42	0.39
21	清潔なー不潔な	0.41	0.09	0.17	0.25
1	暖かいー冷たい	0.41	0.30	0.08	0.35
13	役立つー役に立たない	0.40	0.05	0.03	0.18
11	活動的なー不活発な	-0.12	0.68	0.26	0.45
5	陽気なー陰気な	0.36	0.52	-0.18	0.58
4	明るいー暗い	0.48	0.52	-0.23	0.74
22	意欲的なー無気力な	0.07	0.51	0.23	0.33
15	強いー弱い	-0.18	0.40	-0.02	0.14
18	にぎやかなー寂しい	-0.26	0.36	0.28	0.17
16	容易なー困難な	0.09	0.12	0.64	0.43
10	幸福なー不幸な	-0.01	0.18	0.40	0.18
17	やわらかいーかたい	0.36	-0.03	0.37	0.29
寄与率(%)		23.27	7.13	6.36	
累積寄与率(%)		23.27	30.40	36.76	
α 係数		0.82	0.67	0.53	

12「迷惑でないー迷惑な」、項目番号19「かわいらしいー憎らしい」、項目番号20「親しみやすいー親しみにくい」、項目番号8「身近なー縁遠い」、項目番号3「きれいなー汚い」、項目番号9「怖くないー怖い」、項目番号7「良いー悪い」、項目

番号14「穏やかなー激しい」、項目番号21「清潔なー不潔な」、項目番号1「暖かいー冷たい」、項目番号13「役立つー役に立たない」の11項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第1因子を「親近感」因子と命名した。

第2因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号11「活動的な－不活発な」、項目番号5「陽気な－陰気な」、項目番号4「明るい－暗い」、項目番号22「意欲的な－無気力な」、項目番号15「強い－弱い」、項目番号18「にぎやかな－寂しい」の6項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第2因子を「躍動感」因子と命名した。

第3因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号16「容易な－困難な」、項目番号10「幸福な－不幸な」、項目番号17「やわらかい－かたい」の3項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第3因子を「難解感」因子と命名した。

第1因子：「親近感」（11項目、 $\alpha=0.82$ ）

第2因子：「躍動感」（6項目、 $\alpha=0.67$ ）

第3因子：「難解感」（3項目、 $\alpha=0.53$ ）

よって、上記の20項目3因子を本研究では、初年度における福祉学生のもつ認知症高齢者イメージを捉えるための認知症高齢者イメージ尺度とする。

次に、次年度の認知症高齢者イメージについて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化、および解釈可能性から3因子解を妥当と判断してこれを採用した。また、採用された各因子の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.59\sim0.68$ と信頼性が確認された。3因子の累積寄与率は33.57%であった。各因子の内訳は、第1因子9項目（ $\alpha=0.68$ ）、第2因子6項目（ $\alpha=0.68$ ）、第3因子4項目（ $\alpha=0.59$ ）である。その内容を表6に示す。

表6 認知症高齢者イメージの因子構造(次年度)

項目番号	項目内容	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	共通性
		躍動感	受容感	親和感	
5	陽気な－陰気な	0.67	-0.08	0.19	0.52
4	明るい－暗い	0.66	0.14	-0.06	0.50
1	暖かい－冷たい	0.61	0.03	0.14	0.47
7	良い－悪い	0.50	0.28	0.00	0.44
11	活動的な－不活発な	0.50	-0.13	-0.03	0.20
19	かわいらしい－憎らしい	0.49	0.11	0.18	0.40
22	意欲的な－無気力な	0.45	-0.07	-0.11	0.16
16	容易な－困難な	-0.44	0.04	0.28	0.18
8	身近な－縁遠い	0.37	0.22	-0.06	0.24
12	迷惑でない－迷惑な	-0.05	0.64	-0.15	0.36
14	穏やかな－激しい	-0.07	0.60	0.02	0.34
6	安全な－危険な	-0.47	0.56	0.31	0.39
9	怖くない－怖い	0.03	0.52	0.16	0.35
3	きれいな－汚い	0.20	0.42	-0.16	0.26
21	清潔な－不潔な	0.31	0.40	0.01	0.36
17	やわらかい－かたい	0.04	0.05	0.52	0.31
20	親しみやすい－親しみにくい	0.37	0.00	0.50	0.50
2	単純な－複雑な	-0.12	-0.01	0.42	0.16
10	幸福な－不幸な	0.32	-0.14	0.39	0.29
寄与率(%)		21.28	6.74	5.54	
累積寄与率(%)		21.28	28.02	33.57	
α 係数		0.68	0.68	0.59	

第1因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号5「陽気な－陰気な」、項目番号4「明るい－暗い」、項目番号1「暖かい－冷たい」、項目番号7「良い－悪い」、項目番号11「活動的な－不活発な」、項目番号19「かわいらしい－憎らしい」、項目番号22「意欲的な－無気力な」、項目番号16「容易な－困難な」、項目番号8「身近な－縁遠い」の9項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第1因子を「親近感」因子と命名した。

第2因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号12「迷惑でない－迷惑な」、項目番号14「穏やかな－激しい」、項目番号6「安全な－危険な」、項目番号9「怖くない－怖い」、項目番号3「きれいな－汚い」、項目番号21「清潔な－不潔な」の6項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第2因子を「受容感」因子と命名した。

第3因子は、因子負荷量の高い順に、項目番号17「やわらかい－かたい」、項目番号20「親しみ

やすいー親しみにくい」、項目番号2「単純なー複雑な」、項目番号10「幸福なー不幸な」の4項目からなっており、これらの項目の内容を検討し、第3因子を「親和感」因子と命名した。

第1因子：「躍動感」（9項目、 $\alpha=0.68$ ）

第2因子：「受容感」（6項目、 $\alpha=0.68$ ）

第3因子：「親和感」（4項目、 $\alpha=0.59$ ）

よって、上記の19項目3因子を本研究では、次年度における福祉学生のもつ認知症高齢者イメージを捉えるための認知症高齢者イメージ尺度とする。

3. 福祉学生のもつ性格特性の把握

1) 妥当性尺度（Low Frequency Scale：以下L尺度と略す）

まず、初年度のL尺度の得点分布は0点が105名（男性27名、女性78名）、1点が7名（男性1名、女性6名）、2点が8名（男性1名、女性7名）、3点が3名（男性1名、女性2名）であった。そして、TEGに対する応答態度に関する信頼性が乏しいと判断される4点以上の得点を示す対象者はいなかった。

次に、次年度のL尺度の得点分布は0点が89名（男性24名、女性64名）、1点が6名（男性2名、女性4名）、2点が11名（男性1名、女性10名）であった。なお、4点以上の得点を示す者は、TEGに対する応答態度に関する信頼性が乏しいと

判断されるため、3名（男性1名、女性2名）は対象から除外することとした。

2) 疑問尺度（Question Scale：以下Q尺度と略す）

まず、初年度のQ尺度の得点については最高得点が31点で、80%以上が20点未満であった。なお、35点以上の得点を示す者は、5つの自我状態についての判定を保留した方がよいとされるため、2名（男性1名、女性1名）は対象から除外することとした。

次に、次年度のQ尺度の得点については最高得点が34点で、80%近くが20点未満であった。なお、35点以上の得点を示す者は、5つの自我状態についての判定を保留した方がよいとされるため、1名（女性1名）は対象から除外することとした。

3) 自我状態の変化

福祉学生の自我状態については、各平均得点はCPが7.86、NP13.99、A7.15、FC12.93、AC13.59であり、1年後にはCPが8.84、NP13.77、A8.43、FC12.60、AC12.66であった。新版TEGの男女別パーセンタイル表にプロットした結果は、各年度ともにAC（3.87→3.73）が最も高く、次にNP（3.21→3.23）とFC（3.21→3.08）、そしてCP（2.69→2.90）、最後にA（2.51→2.68）の順であった。（図5）

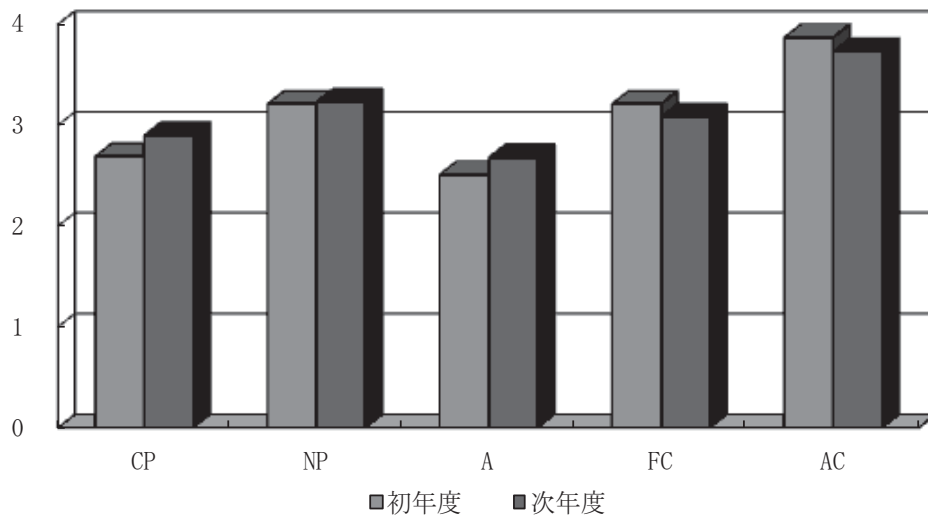


図5 自我状態の変化

4) 新版TEGパターン分類の変化

新版TEGのパターン分類の手順作業に従って各個人別にパターン化した結果、自我状態のパターン出現率はAC優位型が最も多く（39.67%→39.42%）、以下NP優位型（11.57%→7.69%）、

A低位型（9.09%→7.69%）、CP優位型（7.44%→5.77%）、FC優位型（7.44%→4.81%）、CP低位型（4.96%→2.88%）、AC低位型（1.65%→4.81%）、A優位型（3.31%→1.92%）、M型（2.48%→2.88%）、NP低位型（2.48%→1.92%）、

N 型 I (2.48 % → 1.92 %)、C 優位型 (2.48 % → 1.92 %)、平坦型 II (0.83 % → 3.85 %)、N 型 III (0.83 % → 1.92 %)、逆 N 型 I (0.83 % → 1.92 %)、F C 低位型 (0.00 % → 2.88 %)、台形型 III (1.65 % → 0.00 %)、平坦型 I (0.83 % → 0.96 %)、逆 N 型 III (0.00 % → 1.92 %)、U 型 I (0.00 % → 1.00 %)、台形型 II (0.00 % → 0.96 %)、W 型 (0.00 % → 0.96 %) であった。(表 7)

表 7 新版 TEG のパターン別出現率

コード		全体		初年度		次年度	
		度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
5	AC優位型	89	39.56	48	39.67	41	39.42
2	NP優位型	22	9.78	14	11.57	8	7.69
8	A低位型	19	8.44	11	9.09	8	7.69
1	CP優位型	15	6.67	9	7.44	6	5.77
4	FC優位型	14	6.22	9	7.44	5	4.81
6	CP低位型	9	4.00	6	4.96	3	2.88
10	AC低位型	7	3.11	2	1.65	5	4.81
3	A優位型	6	2.67	4	3.31	2	1.92
23	M型	6	2.67	3	2.48	3	2.88
7	NP低位型	5	2.22	3	2.48	2	1.92
17	N型 I	5	2.22	3	2.48	2	1.92
26	平坦型 II	5	2.22	1	0.83	4	3.85
29	C優位型	5	2.22	3	2.48	2	1.92
9	FC低位型	3	1.33	0	0.00	3	2.88
19	N型 III	3	1.33	1	0.83	2	1.92
20	逆N型 I	3	1.33	1	0.83	2	1.92
13	台形型 III	2	0.89	2	1.65	0	0.00
22	逆N型 III	2	0.89	0	0.00	2	1.92
25	平坦型 I	2	0.89	1	0.83	1	0.96
12	台形型 II	1	0.44	0	0.00	1	0.96
14	U型 I	1	0.44	0	0.00	1	1.00
24	W型	1	0.44	0	0.00	1	0.96
11	台形型 I	0	0.00	0	0.00	0	0.00
15	U型 II	0	0.00	0	0.00	0	0.00
16	U型 III	0	0.00	0	0.00	0	0.00
18	N型 II	0	0.00	0	0.00	0	0.00
21	逆N型 II	0	0.00	0	0.00	0	0.00
27	平坦型 III	0	0.00	0	0.00	0	0.00
28	P優位型	0	0.00	0	0.00	0	0.00
	合 計	225	100		100		100
	欠損値	22					

パターン出現率上位の性格的特徴をみると、AC優位型は「人に気づかいして、『No』と言えないので、部下としては与えられた仕事はこなせるが、自分で先頭に立って何かを成し遂げるというのは不得手である」という特徴をもち、次のNP優位型は「人に優しく温かく接する、人の気持ちを理解する、世話をやくという特徴を示し、面倒見のよい人に多く見られる。一方で、過保護、過干渉、おせっかいにならないように注意する必要がある」とされ、これはまさに福祉学生の特徴を表している結果となった。

考察

福祉学生の対人援助職としての倫理観や価値観における経時的変化を明らかにするため、性格特性と援助対象者の捉え方についての変容を明らかにした。

まず、福祉学生の性格特性としてエゴグラムの変化からみると、責任感が強い、厳格である、批判的である、理想をかかげる、完全主義とされる「批判的親 (Critical Parent ; CP)」と現実的である、事実を重要視する、冷静沉着である、効率的に行動する、客観性を重んじるとされる「成人 (Adult ; A)」の値が上がっており、その一

方で、人の評価を気にする、他者を優先する、遠慮がちである、自己主張が少ない、よい子としてふるまうとされる「順応した子ども (Adapted Child; A C)」と自由奔放である、感情をストレートに表現する、明朗快活である、創造的である、活動的である「自由な子ども (Free Child; F C)」の値は下がっていた。また、思いやりがある、世話好き、やさしい、受容的である、同情しやすいとされる「養育的親 (Nurturing Parent; N P)」についてほとんど変化はみられない等の特徴が捉えられた。そして、福祉学生個人の性格パターンをみると、年間を通して出現率がもっとも多いのは、部下としては与えられた仕事はこなせるが自分で先頭に立って何かを成し遂げるというのは不得手であるとされる「A C 優位型」であったが、その比率はやや低下している状況であった。逆に出現率が高くなった主な性格パターンは、他人を助けるために責任を持って最善の方法で仕事をする「A C 低位型」やあらゆる面で平均的で中庸だがやや個性に欠けるとされる「平坦型Ⅱ」、そして上役には従順であるが自分では楽しまないとされる「F C 低位型」であった。このことから福祉学生の性格特性は、責任感が強く、現実的で事実を重要視し、客観性を重んじる傾向が強くなっていたことがわかる。つまり、福祉専門職は臨床現場において利用者のニーズを正確に把握し、支援目標に沿った計画を客観的な視点をもって立案するが、その過程で必要な資質が教育課程において確実に形成されていたのである。

次に、援助対象者イメージの変化については、初年度から次年度にかけて対象者別に因子構造の変化がみられた。ホームレスイメージの因子構造は「無意味」「不快感」「嫌悪感」「距離感」「難解感」から「抵抗感」「不快感」「嫌悪感」「無意味」「憎悪感」に変化しており、その特徴はホームレスを取り巻く多問題性による支援の難しさから拒否的な傾向を示したものとなっていた。そして、認知症高齢者イメージの因子構造は「親近感」「躍動感」「難解感」から「躍動感」「受容感」「親和感」に変化しており、その特徴は認知症に対する支援の難しさを感じつつも対象者を受容し共感する態度がみられた。また、精神障害者イメージの因子構造は各年度ともに「停滞感」「透明感」「恐怖感」となっており、1年間の学びによってもあまり大きなイメージ変化がない状況であった。つまり、対象者別のイメージは、これまでの生活環境で捉えられたイメージをもとに形成されており、福祉

専門職としての資質形成において教育内容で変化を促すためには、意図的かつ計画的に学習プログラムを立てていかなければならないと思われる。

近年、大きな社会問題となっている孤独死や自殺等の背景には貧困や社会的排除があり、これらの課題を解決していく福祉専門職はジェネリックな視点をもった福祉の支援のプロフェッショナルとして成り立たなければならない。

多くの課題に直面している援助対象者と理想的な援助関係を形成するために、福祉専門職はどのようなスキルが求められているのか。

援助関係を福祉心理学の視点で捉えた平野・坂原⁷⁾によれば「本来、援助は被援助者の福祉を向上させることを目的としており、その目的が達成されることによって、被援助者はもとより、援助者にも幸福感情が生じる人間関係である」としている。また、対人援助の難しさについても「援助が不適切であると目的が達成できず、援助者と被援助者の人間関係が悪化する場合もある」と述べている。さらに、援助関係の悪化により生まれるのは不幸感情であるとも指摘している。このように対人援助のスペシャリストである福祉専門職は、真のニーズを捉えた計画的な援助過程において、被援助者の福祉が向上できるように支援していかなければならない。そのためにも、将来の福祉の担い手養成においても、援助対象者のニーズに対応できるスキルを身に付け、価値観と倫理観に基づく行動ができる福祉学生を育てていかなければならないと考える。

おわりに

福祉専門職養成における教育効果として、福祉学生の成長を常に把握し、教育プログラムに反映していくシステムを作ることが求められている。そのためには、教員による客観的評価と学生自身による自己評価を継続的に行い、個々の学習状況を把握するだけでなく、学習プログラム全体の評価も行っていく必要があると考えられる。さらにこれからの福祉教育は、臨床現場で活躍できる人材を養成すべく、養成校と学生のみならず、実践現場との協働で教育プログラムを作成し、実践的な学びの場を決められた施設実習だけでなく、普段の学習においても取り入れていく取り組みが必要であると思われる。

現在、長崎ウエスレヤン大学では福祉専門職養成の新たな取り組みとして、臨床現場と教育現場の連携を図る協同学習の実践を行っている。近年

の急激な社会情勢の変化によって新たなる福祉実践が求められる状況で、教育と臨床の協働的取り組みがこれからの福祉の人材養成に貢献できることを期待しつつその効果を検討していきたい。

引用文献

- 1) 厚生統計協会編『国民の福祉の動向・厚生指標』増刊・第57巻第11号（通巻第898号）、厚生統計協会、2010年、200ページ
- 2) 氏原寛、亀口憲治、成田善弘、東山紘久、山中康裕『心理臨床大辞典』（改訂版）、培風館、2004年、591～596ページ
- 3) 井上正明、小林利宣「日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観」『教育心理研究』第33号、日本教育心理学会、1985年、69～76ページ
- 4) 前掲1) 506～508ページ
- 5) 東京大学医学部心療内科TEG研究会『新版TEG解説とエゴグラム・パターン』、金子書房、2002年、51ページ
- 6) 前掲4) 16ページ
- 7) 平野信喜、坂原明『福祉心理学入門 幸せを育てる心理学』田研出版、2009年、37ページ